

# 目次

---

巻頭文 福のり子	3
・基礎プロジェクト	8
鑑賞者ボランティアの構成	8
各グループ鑑賞作品の紹介	9
アメリカ・アレナスによる学生分析	16
研究員によるレポート	25
学生アンケート集計・分析	35
学生レポート抜粋	44
学生レポート全回答	53
・実践プロジェクト	121
美術館編	121
展覧会 アートでかけ橋 小沢剛 / セリーナ・オウ / パラモデル アートフェスタ in 大山崎町 2008 大山崎小学校 鑑賞ワークショップ「モネパズル」 滋賀県立近代美術館「鑑賞ワークショップ」	
学校・教育編	125
宝塚市立中山五月台小学校 韓国芸術総合学校交流プログラム 京都大学教員免許状更新予備講習「理科大好きな先生になる3日間」 大阪府教育センター研修 島根県教育委員会研修 出雲市教育研究会夏季研修 特殊演習（鑑賞教育）講座 アート・コミュニケーション研究センター準備室セミナー vol.1 羽下大信（甲南大学教授） vol.2 塩瀬隆之（京都大学准教授）	
・シンポジウム報告	136
・ACOP関連取材記事	142
・2009年度活動予定紹介	146
教員免許状更新講習「コミュニケーション・スキルアップの3日間！」 美術館調査「わたしたちがみた当世美術館事情」 科学研究費基盤研究	

## 巻頭文

福 のり子

京都造形芸術大学芸術表現・アートプロデュース学科

### (1) はじめに

京都造形芸術大学芸術表現・アートプロデュース学科では、2004年度から1回生の必修授業として、対話を基本とした鑑賞教育プログラムを行い、毎年、1年間の活動を1冊にまとめ出版している。これは、その5冊目の報告書である。

本プロジェクトは初年度、「鑑賞者研究プロジェクト」という呼び名で出発した。翌年、ひとりの学生から、「鑑賞者云々なんて長いし、カタイし、言いにくい。もっとしっくりくる名前を考えてください」という要望がでた。言い出しっぺの学生に命名を依頼したところ、「ACOP (Art Communication Project)」というすばらしい名前を考えてくれた。「エイコップ」と発音するこの名称は、短く、覚えやすい。そのためか、この名称は「1回生の必修授業」を指すのみならず、私たちが提唱している「コミュニケーションを用いてグループで作品を鑑賞する」ことそのものをも表すようになった。「ACOPをする」がその例だ。さらに、これまでに様々な言葉と組み合わせられ、派生語も生まれた。

例えば、「紙コップ」。ACOPではプロジェクターで作品を投影して、鑑賞会を行う。プロジェクターの用意ができないとき、学生たちはコーヒーショップやアパートなどに集い、紙に印刷した作品をみせあいながら、鑑賞会をすることがある。彼らはそれを「紙コップする」と表現している。

あるいは「エイコップ・ゴッコ」や「まりコップ」。

学生たちは前期に鑑賞者としての能力を高め、後期には作品と鑑賞者を結び、「ナビゲイター」としての訓練を積む。アートとは作品そのものを差すのではなく、それをみる人との間に起こる、不思議で、深淵なコミュニケーション。つまり作品とみる人の間で行われる「キャッチボール」のようなものである。それを複数の人たちで行うと、どこから「球」がとんでくるのかわからない、「パレーボール」のような状態になる。ナビゲイターとは、鑑賞者たちが作品との対話を重ね易いように、あるいは、それを深めるために、場の雰囲気や和らげたり、盛り上げたり、あるいはこぼれた「球」を拾ったりする役目だ。学生たちは、後期、300時間以上もの「自主練習」を行って、ナビゲイターとしての訓練を積み、最終的には学外からボランティアをお客様を招き、「鑑賞会」を開催する。

練習当初、ナビゲイターには「型」があると思う学生が多く、それに自分を当てはめようとする。例えば、前期に私自身が授業で行ってきたナビゲイションを思い出し、真似ようとする学生たちだ。そういう学生たちが、「ナビゲイターには決まった型などない」と気づき始めると、「今まで、私はエイコップ・ゴッコをしていたんだ」と言い出す。あるいは、ナビゲイターの役目とは、自分が思っていることや知っていることだけを伝えることではないと気づいた学生は、(例えば、その学生の名前が「まりこ」ならば)「私は今まで、“まりコップ”をしようとしていたにすぎないんだ」と言い出す。

他にも、こんな使い方があるようだ。「ひとりエイコップができた！」

美術館などで、私たちは通常10秒前後しか作品をみないといわれている。「鑑賞の初心者」といわれる人たちは、ひとりでじっくりと作品と対話をするのがなかなかできない。しかし、複数の人たちと、作品について語り合いながら鑑賞すると、小学生でも、ひとつの作品について30分近く話す事が可能になる。私の学生もこう述べている。

「ひとりでみているだけでは10人分の発見はできない。ひとりでみたら、自分の思う範囲までしか歩いて

いけないけれど、ACOPのようにコミュニケーションを用いて他者とみたら、今まで行ったことのないところまで飛んでいける。」

もちろん、必ずグループで鑑賞しなければならない、というわけではない。究極的には、ひとりじっくりと作品と向き合える、「主体的な鑑賞者」の育成をACOPは目指している。だから、「ひとりエイコップができた！」という学生の言葉は、うれしい報告である。

しかし、これは決して「長時間、作品をみることができた」ということだけを差しているのではない。自らの直感を大切にしながら作品をみ、同時に、その直感がなぜ生まれたかを、作品を再度みて確認する。疑問が浮かんだら、それについて自らが答えをみつける努力をする。ときには、自らの直感や疑問に、「疑問」を投げかける必要もある。こういう作業をするためには、「自分」のなかにもうひとりの「自分」が必要となってくる。画家が制作途中に何度も作品をみなおすように、あるいは文筆家が自らの文章を読み返し校正するように、ここでは鑑賞者自身が自らの思いや考えを、「他者」の目で見つめ直す作業が必要なのだ。だから、「ひとりエイコップができた」という言葉のなかには、複数の視座を自分の中に設定し、自らを俯瞰できるようになったということが含まれている。

もちろんこれは葛藤なしではなしえない。この報告書はだから、学生たちの葛藤の報告書でもある。

4年前にひとりの学生が命名してくれたとき、ACOPはひとつの授業でしかなかった。それが発展し、今年4月から、「アート・コミュニケーション研究センター」が立ち上がった。同センターの設立趣旨は下記のとおりである。

**コミュニケーションの重要性が、社会の様々な場面で訴えられています。家庭や学校といった密接な関係を築く場でさえ「どうしてもっと話し合えなかったのか」と思われるような事件が相次いでいます。このような現状を踏まえ、人が人との間で生きていくために最も重要な要素であるコミュニケーションのあり方・育て方について、美術教育の現場から問い直してみようというのが本センターの設立趣旨です。**

**現在、教育現場では生きる力を高めようとする動きが進んでいます。本センターは美術の分野から、コミュニケーションの問題と「生きる力」の向上にアプローチしていきます。美術は感受性を養うだけでなく、社会の中で主体的に生きる人間を育てる教育コンテンツとしても有効であると考えています。自立した鑑賞者の育成や私達の考えるアートの普及促進を通じ、アートの可能性を広げ、ひいては自らの力でみて、考えて、話し、聞くことのできる主体的な人材の育成に寄与したいと考えています。**

アートにも、そしてコミュニケーションにもひとつの定義や正解などない。だからこそ、五感を研ぎすませ、直感を大切に、想像力を駆使し、考え続け、そして「誤解」や「訂正」を繰り返しながら、作品との対話を持続していかなければならない。それは、アートやコミュニケーションというぼんやりとした輪郭を、各自がそれぞれの方法で色づけしていく作業でもある。

「どこまでも問い続ける。いつまでも答えはない」(谷川俊太郎)

## (2) 基礎篇

### < 目的 >

1 回生を中心として行う「基礎プログラム」の目的は以下のとおりである。

アートとアート作品の違いを学ぶ。アートとは作品と鑑賞者の間におこる、コミュニケーション

であることを理解し、アートが生まれるためには「人」が必要であることを学ぶ。  
学生ひとり一人が、作品との豊かなコミュニケーションを計ることのできる優れた鑑賞者になる。  
将来アート界で働きたいと希望している学生たちに、鑑賞者の存在の重要性と、彼らの不安や不満、喜び、ニーズなどを把握させる。  
「作品」と「観客」のあいだにより密接なコミュニケーションを確立するため、両者を結ぶナビゲーターの重要性を、実践をとおして学ぶ。

## <活動経過>

4月～5月

- ・プロジェクトの意義を理解するために、世界の美術館の成り立ちや現状、鑑賞教育を取り巻く状況、そしてなによりもアートとはなにかについて学ぶ。
- ・古典から現代アート、あるいは通常はアートと思われていないアニメや報道写真など多数の作品をスライドで投影し、クラス全員で話し合いながら鑑賞をしていく。授業のルールとして「一講一口」を設ける。これは授業中必ず一度は自分の意見を述べるというルールである。

6月～7月

- ・作品と鑑賞者を結ぶ「ナビゲーター」となるために、鑑賞者へのアプローチの仕方やコミュニケーション・スキルを学ぶ。
- ・学生各自が好きな作品を選び、自らがナビゲーターとなってその作品を他の学生にみせ、話し合う。その後、初めてのナビゲーター体験の反省や感想を語りあい、それに基づいて新たな作品選び、あるいは練習を重ねる。

8月～9月

- ・後期、学生がナビゲーターとなって行う「鑑賞会」に、鑑賞者として参加してくださるボランティアの方々を、学内外で募る。
- ・学生は夏休みの間に、鑑賞者にみせるための作品を2点選び、それを選んだ理由を文章で提出する。夏休み中にその作品を使って、友人や家族を相手にナビゲーションの練習を始める。

10月

- ・ボランティア鑑賞者のための、説明会を開催する。
- ・学生を2つのグループに分け、それぞれに鑑賞者ボランティア・グループを担当させる。
- ・学生の変化を把握するために、各自「週間報告」をメールで私に送らせる。
- ・学生は夏休みに選んできた作品2点をクラス内で発表し、それらの作品が本プロジェクトに適切か否かを、皆で検討する。また、それらの作品について作者、様式、時代背景などさまざまな角度からの調査研究を重ねる。
- ・学生の意識を高めるため、そしてボランティアで協力してくださる鑑賞者の方々の期待に応えるため、すべての学生に、「オーディション」を行う。これは、各自が選んだ作品を、他の学生を前にしてナビゲーションを行い、当初は私が評価を与えるものである。オーディションで合格点をとらなければ、本番には「出演」できないというルールを作り、合格するまで練習を重ねる。オーディションにパスする為に試行錯誤を重ねる中で、学生たちは「どこがうまくいったのか」あるいは、「どうすれば、もっとすばらしいナビゲーションができるようになるか」を各自、およびグループ毎に考え、理解していく。その結果、学生同士が的確なアドバイスをし合うようになり、最終的には、彼ら自身がオーディションの「審査員」を務められるようになる。

- ・昨年度に ACOP を経験した上級生数名を「メンター」として、各グループにつける。これは私ひとりでは、学生が行うすべての自主練習に参加できないからだ。また、学生にとっては教師である私にはなかなか言えないことなども一年上の先輩には話しやすいし、ACOP の経験から学んだ者として、適切なアドバイスも多数受けられるからである。

11月～12月

- ・鑑賞者ボランティアの方々を招き、対話型鑑賞会の実践開始。鑑賞者にスライドで作品を投影し、学生がナビゲイトしながらみんなで作品について語ってもらう。その際、鑑賞者は「お客様」であるという意識を徹底させる。2グループごとに3回ずつ、各2時間半のセッションを行う。

1月

- ・学生は1年間の活動を振り返り、アンケート及びレポートを提出。

### (3) 実践篇

学生たちがナビゲイターとなり、様々な観客に対して対話型鑑賞会や授業、ワークショップなどを行った。さらには鑑賞者/利用者の視点を取り入れた展覧会を企画し、関連プログラムとして様々な企画を学生の手で造り上げる。本年度、ACOP 2年目の学生が行ったプロジェクトは P119 以下にまとめたので、ご参照いただきたい。

### (4) 謝辞

今年も、たくさんの方々にボランティアの鑑賞者として、はるばる京都の北の端までご来校いただき、本当にありがとうございました。このプログラムのギリギリまで、つまり、皆様を招いての「本番」を迎える直前まで、多くの学生は「自分のことで精一杯」の状態でした。しかし、皆様との鑑賞会を経た後、学生たちは皆様について、こんな文章を書くようになります。

\* 先輩や先生がお客様は鋭いよ！ とよく言っていた意味が1回目にして解りました。班員の選んだ作品にしても自分の選んだものにしても、私たちは何か月もかけてみて、考えてきました。その中で出てきた自分なりのゴールにお客様はいとも簡単に到達してしまう。そしてそこからまた新たに発展した議論が生まれ出ました。

\* 「お客様」という表現はすごくうまい表現だなと思う。「客」というと、もてなす側からすれば、普通ならお金を下さるような一線を引いた相手のことだと思う。来てくださる鑑賞者のことをそう表現することで、私たち学生は授業を受けている単なる「学生」ではなく、「もてなす立場」に立たされる。それがよい危機感をもたらしているのかもしれない。(中略)お客様は忍耐強く優しい方ばかりだったなと、つくづく思います。このプロジェクトはある意味で、社会に出るための勉強として、お客様から私たち学生が「もてな」していただいているのだと思いました。

5年間で鑑賞者としてお越しいただいた方々は、述べ700名余りにも達します。こういった皆様方のおかげで、学生たちは「教室」だけに閉じこもってはい決して得られない、多くの大切なものを学ばせていただきました。深くお礼を申し上げます。コミュニケーションに終わりがないように、ACOPも続いて行きます。どうかこれからもご協力いただけますよう、よろしく願いいたします。

最後になりましたが、私たちにさまざまな実践の場を与えてくださったアサヒビール大山崎山荘美術館、京都府大山崎町の皆様、宝塚市立中山五月台小学校、島根県教育委員会浜田教育センター、出雲市教育研究会の先生方、大阪府教育センター、京都市教育委員会、京都府教育委員会、そして滋賀県立近代美術館と京都大学総合博物館の皆様にも心からお礼を申し上げます。

京都造形芸術大学芸術表現・アートプロデュース学科教授  
アート・コミュニケーション研究センター代表  
福 のり子  
2009年6月